

とだ しょういち
戸田 庄一

働くということについて

日本郵政グループ労働組合
(JP労組)・副中央執行委員長

新しい年を迎えることができました。

「穏やかな年であって欲しい」と、心から願ってやみません。

あの東日本大震災は、被災者の皆さんのみならず、日本の、いや世界中の多くの人々に、大きな衝撃を与えました。

7年前に中越大震災を体験し、柏崎刈羽原発の30キロ圏内に家族を住まわせている者として、今、感じていることを記しました。

【2011年3月11日】

長野市の組合事務室に居ました。「長くて大きな揺れ」を感じ、震源地と状況を確認すべく、直ぐにテレビをつけました。

今も記憶に残るテレビ画面は、枯れ野のような白茶けた田畑を下の方から津波が襲い、不気味な感じで黒い色に変えながら進んで行くもので、その先には道路があり、何事もないうように車が何台も走っていました。現実として受け留めようのない光景が、次々と映し出されていました。

目を背けた事務室の外の風景は日常そのもので、何故か無性に腹立たしかったことを覚えていています。

その後、被災地を目の当たりにした時の気持ち、文字で表すことは出来ません。ただ、鼻の辺りがむず痒くなり、胸が締め付けられ、無力感にさいなまれました。

この震災は、あらゆる分野においてこれまでの常識を再考する機会となりました。

【新潟中越地震 - 2004年10月23日】

土曜日で、親戚の法要で自宅に帰っていま

した(旧、中魚沼郡川西町)。夕食前の時間で、激しく揺れ、立っていただけませんでした。その後、ほぼ30分おきに都合3回揺れました。後に「震度6強」だったと知りました。

恐怖感から近所の殆どの人が、家の中ではなく「車の中」で一夜を過ごしました。どの家も家具が倒れ、壁が落ち、足の踏み場もない状態でしたが、幸いにも近所で倒壊した家はありませんでした。

2日後の月曜日、殆どの職員が自宅の後片付けもそこそこに出勤しました。兼業農家の組合員は、職員数の「おにぎり」を持参し、みんなで分け合いました。水・火・食料は何とかなりました。「田舎は強い」を実感しました。

多くの支援を、全国の組合員から頂きました。感謝とお礼の意味から、被災組合員のアンケート調査を実施し、危機管理対応マニュアル-冊子「がんばっています 新潟」としてまとめ、配布しました。

支援のありがたさ、言葉の大切さ、協力し合うこと・リーダーの決断力の重要性等を認識しました。

支援する立場になったら、「できることは全てやる」。強く思いました。

【ボランティアによる支援活動】

震災直後から、多くのボランティアの皆さんが、支援に駆けつけています。

連合の救援ボランティアには、のべで34,549人が参加し、JP労組も、189日間、のべ1,411人が参加しました。

とてもきつい作業でしたが、例外なく参加



した組合員から聞いた感想は、明るく前向きな言葉でした。自信を持って、体験談を報告しています。救援ボランティアに参加したこと、支援できたことに「感謝」しています。

痛みを、そして思いを共有できたということだと思います。

J P 労組では、当面3年を目途に、被害の大きかった地域（支部）を対象に支援活動を行っています。被災支部ごとに担当する地方本部を配置し、支援する側の都合や思いではなく、支援を受ける組合員・家族の気持ちを尊重した支援活動をすることとしています。

「日本の活動に感銘」という記事がありました。国際ボランティア計画（UNV）の事務局長の言葉で、ボランティアが写真を捜し、洗い、そして持ち主に返す、という活動に感銘し、「GNPの増大だけを求める時代は終わった。『絆』で表される、助け合う価値観こそが必要だ」というものです。

生き甲斐・働きがいを考えさせられました。

【非常時における労働】

地震発生直後から、日常であれば「異常」ともいえる対応が求められました。求められたというよりも、行わざるを得なかったでしょうし、使命感でもあったと思います。

電気・ガス・水道・通信・輸送...、そして行政や教育関係等々、生活基盤に携わる労働は勿論でしたが、あらゆる分野で不眠不休、限界を超えるような労働状態を余儀なくされました。あまりにも悲惨な作業等により、事後のケアが必要な事例もあるとも聞いています。

とにかく初めての経験で、「無我夢中・走りながら対応」が、正直なところだったと思います。「非常時における対応」として例外視することなく、厳しい対応もお願いした労働組合の責任として検証し、安全を第一義に、危機対策マニュアルや安全基準等の策定が必要と考えます。

特に、初期対応については、人命に直結する課題として教訓化しなければならないと思っています。

【2012年を迎えて】

復旧・復興とはほど遠い状態の中で「暮らし」が再開され、家族が、地域が、職場が動き始め、明るい話題も報道されるようになりました。その過程で、「働く」ということが、生活の再スタートに際し、生計面だけではなく、「明るさや希望」に大きく関与していることを再認識しました。

声としての「働いていると前に進んでいる感じがする」、「働くこと、働けることはすばらしい」等々です。

また、こんな言葉にも考えさせられました。

「昔の日本では、一人前の大人がしなければならぬことは2つ有った。『かせぎ』と『つとめ』。『つとめ』とは、世間全体に対する債務のようなもの。日本だけでなく世界全体が『かせぎ』に傾いていたのではない。（文章は大意）」

自分で答えは出せていませんが、働く場さえ奪われたままの人たちが少なくないことにも思いを馳せ、「働く」ということを考える年にしたいと思っています。